

## 日本時間生物学会 第25回定期学術大会参加記

鳥井 孝太郎<sup>✉</sup>

京都大学 生命科学研究所 統合生命科学専攻

2018年10月20日から21日に長崎で開催された第25回日本時間生物学会学術大会に参加しました。初めて参加した2014年の大会では遠藤求先生のグループの学生は私1人でしたが、今回は遠藤研の6人の学生が参加し、賑やかな学会となりました。ただ、長崎到着後、会場まで向かう道中では坂道が堪え、話すこともままならず一人無口によく孤独な時間もありました。

多様性に富んだ時間生物学会は何度参加しても、驚きと興味の尽きない場であり、今回も多くの人に感銘を受けました。アブラムシの姉世代、妹世代を継代し続けることで、季節タイマーが世代数ではなく日数による制御を受けることを示された、沼田英治先生の話は特に記憶に残っています。また、生まれた直後のアブラムシの体内にすでに子がおり、その子の中にさらに子がいるとお聞きした時には、生物の奥深さとその奥深さを学問として扱える時間生物学の懐の深さに感動しました。また、マグマ活動による redox 勾配が原始生物における代謝ネットワークの駆動力である、とのお話には圧倒的な新鮮さを感じました。質疑応答の際に『生物の起源はマグマなので』と言い切った中村龍平先生のお姿は今でも思い返すことがあります。

ポスター発表もまた毎回様々な議題があり、回り続けても飽きることがありません。カニの話聞いたから次は魚行くか、とまるで居酒屋にいるような気分です。その多様性を楽しみました。また、時間生物学会には多様性だけでなくテーマ間での親和性もあり、同様の



会場にて（筆者は前列右から3番目）

現象に対して様々なアプローチがなされている点もこの学会の特徴だと思います。今回もシアノバクテリア概日時計についての多面的な解析と発表間でつながりのあるストーリーを楽しむことができました。ポスター発表の前にあるデータブリッツでは工夫を凝らした発表もあり、参考になりました。私はデータブリッツが得意ではなく、短さにかまけた手抜きスライドになっていたことに終わってから気づきました。やはり、ポスター発表の場では「君のデータブリッツはさっぱり分からなかった」と酷評をいただき、次はしっかりしたものを作ろうと自戒の機会となりました。そんな、ポスター発表でしたが、運よくポスター賞をいただきました。賞状をいただいた経験が今までなかったのも、壇上では賞状を受け取る際の距離感がつかめず、終始前後にぶれ続け、自分らしい授与式となりました。式後、賞金として懇親会費を参加した方のみ頂けることを知りましたが、お金をケチり懇親会に参加しなかったことが今でも心残りです。

今大会も多くのことを学ばせていただきました。今大会を主催していただいた先生方、関係者の皆様にご場をお借りしてお礼申し上げます。稚拙な文章ですが、お読みいただきありがとうございます。



懇親会でふるまわれたというお寿司。逃した魚は大きかったようです。

✉ torii.kotaro.47s@st.kyoto-u.ac.jp